かくれんぼ(日本代表への道のり編)

蓮斗パパ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かくれんぼ（日本代表への道のり編）

【Ｎコード】
Ｎ８４８９Ｏ

【作者名】
蓮斗パパ

【あらすじ】
かくれんぼの日本代表を決める大会に出場する事にした主人公。果たして結果は…？

『西暦２０６０年、オリンピックの正式種目に、かくれんぼが採用されました』

テレビのニュース速報が流れた。

次の日…各メディアでは、来月に日本代表を決める大会が開かれる事が報じられた…

吉田秀人…２８歳独身、郵便局勤務。

小さな頃卒業文集に書いた夢は、五輪でメダルをとることだった。

昔は足が早く小学校の徒競走ではいつも１位だった。だが中学、高校とタイムが伸びず、いつしか走る事が少しずつ嫌いになっていった。

そんな吉田だったが、かくれんぼの日本代表を選考する大会（Ｊａｐａｎｋａｋｕｒｅｎｂｏｔｏｕｒｎａｍｅｎｔ通称ＪＫＴ）に出ることにした。

理由は、まだ正式な代表が決まっておらず、誰にでもチャンスがあったからだ。ただ、誰しもが経験した遊びだけに、ルールやどれだけの人数が集まるかなど、全くの未知数だった。

…　大会当日…

「ここでやるのか？」

吉田は少し戸惑った。実行委員会の案内状に記された場所は、自宅から２～３キロしかはなれていない空き地だった。そこに実行委員会の本部と思われるテントがあるだけ。

でも人はまばらだが、確かに集まって来た。

「皆さんよくお越しくださいました。ただいまより、２０６０年京都オリンピックの正式種目『かくれんぼ』の代表選考会を始めます。ただ今より参加人数、ルール説明などを言いますので、きちんと聞

いていてください」
　司会者によると参加者は、下が１６歳から７５歳までの２２８人だそうだ。
「意外と少ないな」
　確かに凄みを感じるような、いわゆる強敵っぽい奴は見当たらなかった。それに辺りを見渡しても、子供や中年のおっさんしか目につかなかった。
「あれ？ほんとにここでいいんだよな…」
　不安な気持ちと、少し気合いを入れてきた自分が恥ずかしかった。
　そして、参加者達にゼッケンが配られた。布で作られていてベストの様になっており、頭からかぶって着るタイプだ。そして、端の方には金属製の物が埋められていた。
　関係者の説明では、ＧＰＳの機能を備えているとの事。範囲外に隠れるのを防ぐためで、無論鬼はそれを利用することは無いようだ。
「俺は１１３番か」
　まぁ何番でもいいけどさ。吉田は少しやる気が無くなっていた。子供やオッサン相手なら楽勝だと楽観視してた。
　ルールは至って簡単だった。大会側が用意した鬼１０人に、捕まらなければ良いとの事。制限時間は昼の１２時から２４時間、つまり明日の昼までだ。
「たったこれだけで日本代表になれるのか？」吉田の中で日本代表の重みが薄れてきた。
　…ルール説明は続いていた。
「立ち入り禁止の場所には入らない。民家も禁止…」
「しつも～ん」
　隣の若い人が手を上げた。
「どうぞ」
「２４時間って事は夜も隠れてるよね？でも民家はダメなんでしょ

？ホテルって訳にもいかないし…寒くない？」
確かに若者の言う通りだと吉田も思った。
だが、司会者がゆっくりマイクを口にあて言った、「この大会において参加者の皆さんの安全は保証致しません。いやならお帰りください」
「えー！」参加者達からは一斉にブーイングが起きた。
それを無視しながら司会者はルール説明を続けた。
「やってらんねーよ」
１人、２人と何人か帰って行くのがわかった。
「オレも帰ろうかな」
…吉田は少し迷った。でもやっぱり日本代表という響きに惹かれた事と、有給をとっていたことで残ることにした。
「せっかく有給とったんだしな」
３０人程帰っただろうか、人が少なくなったのがわかった。
…では１時間後にはじめます。
「あれ？もう始まるの？」
現在１１時。
隠れる時間は今から１時間。
正午丁度に鬼はスタートするらしい。
何処に隠れよう…
吉田が迷っている間に、他の参加者達はもう走り出していた。
だが吉田には多少の勝算があった。郵便局の仕事がら、この辺りの地理には詳しかったからだ。
「あれ？待てよ範囲は何処までだ？」
吉田は説明をあまり聞いていなかったため、よくわかっていなかった。仕方なく近くにいた人に話を聞くことにした。
「すいません！範囲は何処までですか？」
「…」
その人は無視して走り出した。
「…なるほど、戦いはもう始まっているのか」

結局吉田は大会関係者に話を聞く事にした。
今いる地点から半径1キロ迄との事。
「そうかぁ…1．5キロ先なら良いところがあったんだけどなぁ…」
「残り30分です。」
アナウンスが流れて吉田は焦った。
「どうしよう…」
その時吉田は閃いた。
「あっ！そうだ、あそこにしよう！」

現在11時59分50秒

…「ピー」…
甲高い笛の合図と同時に鬼は走り出した。

現在午後2時35分

始まってから2時間半が経過し、既に約50人程見つかっていた。だがまだ吉田は見つかっていなかった。
いつ鬼が来るかわからない、ドキドキ感が吉田には少したまらなかった。
見つかった人の多くは、スタート地点から遠いところの公園や、空き地が多かった。
吉田の読み通りだった。見つかりたくないだけに、なるべく遠くへ行くだろう、というのが人間の心理で、鬼は逆にそこをついてくると思った。
だから吉田は、100メートルにも満たない陸上競技場にいた。
しかも幸運な事にこの日は近くで陸上の大会があったのだ。
そのためゼッケンを着けた人はあっちこっちにいた。

こそこそすると逆に怪しいので、競技場の中心でストレッチなんかしながら堂々としていた。実際鬼はここにも探しに来ていて、トイレや観客の椅子の下など、６人程捕まえていた。

現在午後３時１３分

「そろそろだな」

吉田は次の作戦に移ることにした。

陸上の競技時間が終わりに近づいてきたため、ゼッケンを着けている人が少なくなってきていたからだ。

吉田は辺りを警戒し、鬼に見つからないよう慎重に移動した。

「おそらく夜になれば暗くなるから、見つかりにくいはず。」

そのため後２～３時間と、明日の明るくなってからが勝負だと思っていた。

次に隠れる場所は決めていた。

それは、最初に鬼が多くの人を見つけてきた所だった。

１度探し尽くした場所なら、逆に安全だと考えたのだ。

現在午後５時２０分

「ふ～」吉田は静かに大きく息を吐いた。慎重に来たせいで時間はかかった。だが狙い通り辺りは暗くなり始めていた。かといって油断する事なく警戒しながら隠れた。

「ここに隠れてた人もいたのかもな。」

人が入れそうな大きさのゴミ箱は蓋が開いていた。

公園に来た吉田は、ここでは隠れる場所を特定せずに、木の影に隠れてるだけだった。

それは人の気配がしたら移動して逃げるためでもあったが、実際暗いことと、もう探し終わった場所ということで、それだけで充分だった。

どれくらいたっただろうか…
「チュンチュン」
雀も鳴き始めた。ふっと腕時計を見た。

現在午前7時

「後5時間…明るくなってきたし、このままここに隠れてて大丈夫だろうか…。」　隠れて逃げ続けるということは、予想以上に不安が襲ってくる。
吉田もまた冷静な判断ができなくなっていた。
少し考えて、やっぱりここを移動することにした。
「さてと…何処に行こうか…少し離れた空き地か…いや、あそこに隠れるような所は無いはずだ」
「また競技場にするか…いやいや、ゼッケンを着けてる人が居なきゃ意味がないよな…」

現在午前8時

移動出来ぬまま1時間が経過していた。
遠くの方では通学中の学生や、サラリーマンの姿が見え始めた。
…『！』…
吉田はまばらな人の中に、辺りをキョロキョロしながら歩いている人を見つける。
…たぶん、鬼だ。思えば、鬼がどんな格好か聞いていなかった。たぶん、説明はあったのだろう。だが吉田は聞いていなかった。
鬼は特別な格好というわけでなく、スーツを着た至って普通の人だった。
「このままなら見つかる！」
吉田は走り出した。
「全力で走るのは何年ぶりだろ…」

「高校の時以来かな…いや就職して初めて寝坊した時も走ったな」
今はとにかく速く、出来るだけ遠くへ…何処に向かうわけでもなく吉田は走りだした。そしてなんとか街中まで来ていた。
「そうだ！あそこを曲がればなんとかなるかも…」
その先には小さな路地があった。
郵便局員で、配達作業があるから、吉田はその場所を知っていた。

現在午前９時２６分

「後２時間半…よし後少し…イケる！」
ビルとビルの間を曲がり狭い道を進んだ。
なんとか路地裏に着いた吉田は、安心して「ふ～」と、また大きく息を吐いた。
だが次の瞬間、誰かが肩を叩いた。
「見ぃつけた！」
…鬼の手だった。
呆然としている吉田をよそに、鬼は携帯を取りだし話し始めた。
「午前１０時２分、１１３番見つけました！」　我にかえり、よく見るとさっきのスーツの男だった。
「惜しかったね。あなたをいれて後３人だったんですよ」
鬼の言葉が虚しく響いた。
甘かった。ついさっきまで本気でイケると思ってた。後３人だっただけに、吉田は余計悔しくなった。
会場に戻ると、吉田を温かい拍手が迎えてくれた。

現在午前１１時

残る２人のうち１人が見つかった。２０歳そこそこの若い男だった。
後１人…

「最後はどんな人だろう？」
１２時直前カウントダウンが始まった。
「…３…２…１」

現在正午

「ピー！」

大会の終わりを告げる笛が鳴った。
２～３分すると、ゼッケンを着けたオッサンが歩いてきた。
「あの人が？」
吉田は驚いた。
あまりにも普通のオッサンだったからだ。
聞けば昨日から会場近くに隠れていたそうだ。
吉田の最初の作戦は正解だった。しかし、狙いは良かったが、動いたことが敗因だったのだ。いや、そもそも、オッサンや若者を甘く見ていた事自体、間違っていたのかもしれない。彼らは紛れもなく強敵だったのだから…
表彰式が行われ、表彰台の低いとこで、吉田は価値の無いメダルを首にかけられた。
「でもまぁいっか」
吉田は熱くドキドキした日を過ごせた事に少し満足していた。
「でも今日はこれからなにをして過ごそうかな…」
吉田は、有給の残りをどうするか考えながら、家路に着いた。

…１週間後

吉田のもとに全国大会の案内状が届いた。
そう、あれは言ってみれば地方大会だったのだ。
３位まで入ると全国へ行けるらしい…

少し笑って吉田は思った。
「また有給とらなくちゃ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8489o/

かくれんぼ(日本代表への道のり編)

2010年12月30日14時10分発行